ダークユールに贖いを

＜物語の背景＞

10年に１度、どこか北の果てにある街に、吸血鬼たちが集まる。

夜が20時間以上続く、暗い冬至祭、ダークユールの日。そこで吸血鬼たちは、人間という種族にどう対処してゆくかを話し合う。

今年、大集会の地に選ばれたのは、北欧のとある観光都市だ。吸血鬼の一員であるオーナーが経営するクラブ「ノー・ワイン」が会場となった。

この大集会は、激しい議論の場になることが予想された。21世紀を迎えて人間たちも変わり、いままでのように餌にし続けることが難しくなっていたからだ。吸血鬼たちは、人間をどうするかについて、２つの派閥に分かれた。それぞれ制圧派と共存派と名乗り、対立している。中立の立場をとる者も多いが、夜ごと緊張は高まっていた。

さらに吸血鬼たちをざわつかせたのは、千年以上を生きている長生者（エルダー）の１人が目覚めたという噂だ。吸血鬼を超えた吸血鬼、強すぎるために、長い年月その姿を隠していたはずの長生者は、何を目的として目覚めたのだろう？

そして大集会当日の夜が訪れた、開始は零時ちょうど。だが、その１時間前に、猛烈な吹雪が街を襲った。

人間だけでなく、多くの吸血鬼たちも吹雪に足止めされた。寒さはともかく、ふりそそぐ雪もまた広義の「流れる水」だ。よほど強い吸血鬼以外は、動きを邪魔されてしまう。

もちろん、派閥を代表するほどのつわものは、このくらいで阻まれることはない。

零時ちょうど、予定通りに、クラブ「ノー・ワイン」に姿を見せて、参加者のあかしである古い金貨を示したのは、共存派のトップ「伯爵」とその「従僕」、制圧派の象徴「令嬢」に、派閥に属さぬもののまとめ役を自称する「枢機卿」だ。

すぐに話し合いを始めてもよかったが、それぞれが「ナンバー２を待ちたい」と主張した。

伯爵が率いる共存派のナンバー２は「男爵」と呼ばれる同族に最も人気がある吸血鬼だ。令嬢のもとに集う制圧派のナンバー２「疫病の王」は、つい先日派閥を鞍替えした嫌われ者である。

30分ほどがすぎて、さらに数人が「ノー・ワイン」を訪れた。はじめて見る顔の新参者たちだ。

そのうちの１人、若い娘が告げた。

――駐車場にあった雪のかたまりから、黒焦げの死体を見つけた――

派閥のトップたちが互いを睨みつけた。これは、まだ現れないナンバー２のどちらかに違いないと考えたからだ。さらにもうひとつの懸念を新参者の１人が告げた。

――吸血鬼を狩る者たち、ヴァンパイアハンターがこの大集会のことをかぎつけた。既に入りこんでいるかもしれない――

吸血鬼は人間より遥かに優れた存在だが、ヴァンパイアハンターは警戒すべき敵だ。犠牲も数多く出ている。

ふたたび吹雪が激しくなった。未熟な吸血鬼たちがやってくるのは、吹雪がおさまってからだろう。その前に、黒焦げ死体が「男爵」か「疫病の王」かを特定し、さらに犯人を見つけねばならない。

＜登場人物＞

・伯爵（男性）
・令嬢（女性）
・枢機卿（男性）
・オーナー（男性）
・パンクス（女性）
・ゴスロリ（女性）
・プレイボーイ（男性）
・従僕（男性）
・ウェイトレス（女性）